

バリアフリー絵本・童話シリーズ
Dreaming Tales



—サンタランドのなかまたち—

びんのなかのてがみ

さく：にいの☆ゆうひこ

え：きむらりさ



サンタランドの南の海を見おろせる丘で、トナカイのウィーボとポツクルはおいしそうにバイソングラスを食べていました。二人はこの草が大好き。ちよと苦いけど、それが元気の素になるのです。なにしろクリスマスには世界中を駆け回らなくちゃいけません。だから今のうちにどんどん食べるのです。

「モシャモシャ、あ、ワイマールだ！」

ポツクルにいわれて、高い空を見上げたウィーボにも、すべるように飛んでくるかもめのワイマールの姿が見えました。胸には手紙でいっぱいにくらんだカバンを持っています。

「ハロー、ウィーボ。ハロー、ポツクル」

クルクルと3回輪を描きながら、ワイマールが降りてきました。

「こんにちは、ワイマール。モシャモシャ」

「また子どもたちの手紙を持ってきたんだね」

「そうなんだ。もう11月だからね、だんだん増えてきたよ」

「ころろさま。お茶でものんでくかい？ モシャモシャ」

「ダメダメ。急がないと、日が暮れちゃうよ」

ワイマールはそういうと、ふたたび舞い上がって、丘の上にあるサンタさんの家まで飛んでいきました。そして赤い郵便受けに手紙を入れました。ドサドサドサ。カバンの中身はすべてサンタさん宛のものです。

チロチロリン。サンタさんの郵便受けは手紙が入ると鈴がなるんです。その音をききつけて、犬のワンターが白い毛むくじらの姿を見せました。

「こんにちは。ワンター。手紙はおいたよ。じゃあねえ」

ワイマールは返事を聞く間もなく、飛び去りました。のんびり屋のワンターのあいさつなど待ってられません。礼儀正しいワンターは相手がいなくなっても

「ワンワン。どうもありがとうだワン」といいました。



サンタさんの部屋には、赤い水玉模様の大きな箱が置いてあります。世界中にここにしかない魔法の箱です。サンタさんはこの箱で、世界中の子どもたちにプレゼントをつくっているのです。

「ほほう。今日はまたずいぶんたくさんのお手紙がきたようじゃな」

サンタさんは、袋を目の前において、目を閉じました。封を開けなくても手紙を読むことができます。手紙には子どもたちのプレゼントのお願いが書いてありました。

「いい子にします。だからクマさんのお人形が欲しい」

『大きな絵本だったらいいなあ』

『サンタさん、乗り物のおもちゃをください。』

いろいろなことが書いてあります。サンタさんにはっこり笑ったり、うんうんとうなずいたりしました。中には『自転車欲しいっていったけど、望遠鏡にしてください』なんていう手紙までありました。

でも、お願いしたものを必ずもらえるわけではありません。サンタさんは、その子にちょうどいいと思うものを考えてプレゼントするのです。だって5歳の子どもが『うでどけい』をもらっても、使えませんがね。

目をつむったまま手紙を読んでいたサンタさんの顔がとつぜんくもりました。

「これは・・・うーん」

サンタさんは素晴らしいながら、手紙の山から1つのピンを取り上げました。ピンに入っている手紙だったので。そして手紙を出して広げました。

ワンワン。とても珍しいことなので、ワンダーも心配そうにのぞきこみました。その手紙にはこう書かれていたのです。

『ボクにはお母さんがいません。サンタさん、お母さんをください』



サンタさんは便せん裏側を見ました。「マルティンより」と書いてあります。手紙をポケットの中に入れて、サンタさんはワンターにみんなを呼ぶようにいいました。

サンタさんの椅子の回りに、サンタランドのみんなが集まりました。

黄色と緑の羽が自慢のオウムのヘロル。

いたずらそうな目をしたアライクマのボビー。

おしゃれ好きで、すらっとした姿のハツカネズミのマリアン。

そしてトナカイのヴィーボとボックルです。

みんないつもは元気なのに、今日はサンタさんの様子を見ても静かになってしまいました。

「さあ、みんな手をうらないで」

サンタさんにいわれて、みんなは手をつなぎました。すると、みんなの頭の中にマルティンの姿が見えてきました。

マルティンは港のある町にお父さんとふたりで住んでいます。お父さんのお仕事は大工さん。朝早くからでかけるので、朝ごはんを食べてから、暗くなるまでマルティンはひとりです。お母さんは、マルティンがよちよち歩きをし始めた頃に、病気でなくなつたのです。

もちろん、小学校に行けばお友だちはいます。でも2学期になつてから、お友だちはひとりふたりとだんだん減つていきました。

「どうしてなの？」

マリアンがたずねました。

「まあ、見ていてくらん」

サンタさんはそうこたえてまた目をつむりました。



学校の教室。マルティンはクラスのお友だちのクララから、ピンク色のかわいい筆箱をとりあげて投げつけました。筆箱は壁にあたって、はじつこの方がへこんでしまいました。えんぴつや消しゴムが床にちらばっています。

クララが泣き出すと、マルティンはしばらくだまって見ていましたが、教室から逃げ出しました。

校庭では、何人かの友だちがボール遊びをしていました。マルティンはそのボールを遠くの方までけつとぼしました。ボールはボールとはずんで、学校の外を流れる川の中に落ちてしまいました。

友だちは怒ってマルティンにつかみかかりましたが、マルティンはひよいとよけると、そのまま学校の外まで逃げてしまいました。

そこまで見たところで、サンタランドのみんなが話しました。

「ねえ、マルティン君で悪い子みたい」とオウムのヘロル。

「これじゃお友だちとはできないわよ」とはつかねずみのマリアン。

「ボクもマルティン君と遊ぶのはいやだな」とトナカイのヴィーボ。

「だけど、お母さんがいないのはかわいそうだよ」とホツクル。

「だからって、こんなイタズラしていいのかよ」とあらいぐまのポービー。

マルティンはすなおない子だと思っていたので、みんなは少しショクでした。

サンタさんはずっとだまってみんなの話をきいてました。

「どうするの、サンタさん」

マリアンがききました。

サンタさんは白いひげをさわりながらこたえました。

「あわてちゃいかなぞ。みんな、もう一度、見てみないかね」
みんなはもう一度手をつなぎました。



さつきと同じマルティンの教室。クララが自慢そうな顔で筆箱をお友だちに見せていました。

「ね、すてきな筆箱でしょ。お母さんに買ってもらったのよ。」

私はピンクが好きだから」

「きれいなえ。いいなあ。私も買って欲しいな」

とお友だちもみんなうらやましそう。

そこにマルティンがやってきました。マルティンは筆箱をちらちらとみて

「な〜んだ。なにかと思ったら筆箱か」

といました。

「なによ。マルティン君なんかに見せたくないわ。あつちに行くてよ」

「へーんだ。そんなもん見たくないよ」

「私のお母さんが買ってくれたのに、そんないい方じゃないですよ。」

あ、そうか。マルティン君にはわからないわよね。お母さんいないんだし」

それをきいたとたんにマルティンの顔が真っ赤になって、クララの筆箱を投げたのです。

校庭に逃げ出したマルティンの目の前でみんながボール遊びをしていました。でもマルティンをみかけた友だちは、いっせ

いにはやりました。

「あ、マルティンだ、マルティンだ」

「洗濯してない服きてるぞ。さわられると汚れるぞ」

「こっちに來るなよ」

そのうちの一人が、マルティンにボールを投げつけました。ボールはマルティンの背中にあたって足下に転がりました。マルティンはすぐにそのボールをひろって、おもいきりけとばしたのです。



その夜、いつもよりも遅く8時頃になってマルティンのお父さんは帰ってきました。

「おかえりなさい、お父さん」

お父さんは、着ていた上着を脱いで、じろっとマルティンの方を見ました。マルティンはびくっと立ちすくんでしまいました。お父さんが怒っているのがすくなくわかったからです。

「マルティン、おまえ学校で女の子の筆箱を壊したんだってな」

マルティンは恐くて、声がでません。

お父さんはやれやれという顔をして、椅子に腰掛け、マルティンの両腕をにぎりました。

「いいかい、マルティン。おまえがさびしいのはお父さんもよくわかる。もっとおまえと話をしたいんだけどそうそう時間もとれないんだ。だから、お友だちとは仲良くして欲しいんだよ」それから、お父さんはマルティンを抱き上げて、自分の大きなひさの上のせました。

「男同士だからな、正直にいおう。お父さんもマルティンにどうしてあげるのがいちばんいいのか、よくわからない。お母さんには『マルティンのことは心配するな』と約束したっていうのにな。マルティン、おまえはどうして欲しい？」

お父さんがあまり怒らないので、マルティンは少し安心しました。でも、お母さんの話が出て、今度は悲しくなりました。

「なにも…ボクにもよくわかんない」

「そうか、そうか。それじゃあもう少し二人で考えるところか。どっちがいいかたえをみつけるか競争だな」

「うん」

「そうだ、今度の日曜日にピクニックに行こう。それとも、お友だちをおうちに呼んでもいいぞ。お父さん、おいしいピザをつくるから。どっちがいい？」

マルティンは「ピクニック」とこたえました。もしも自分の家に友だちをささっても、誰も来てくれないと思ったからです。それをお父さんについてはいけなことも思ったからです。



夜遅く、ベッドの中でマルティンはずっと考えていました。マルティンにはお父さんが困っていることがよくわかりました。泣いていたクララの顔を思い出すと、胸の奥が痛くなりました。

みんな自分のせいだということもわかって、とても悲しくなりました。

「ボクがいい子になればいいんだ」

それなのに、みんなに嫌われるようなことをしている自分がいやになりました。お母さんのことをいわれたり、仲間はずれにされると、どうしても頭の中が熱くなってしまうのです。

「お母さんがいないから、ボクは悪い子なのかな」

そのとき、マルティンは名案を思いつきました。

『そうだ！サンタさんにお母さんをプレゼントしてもらえばいいんだ』

ベッドから飛び起きると、マルティンはサンタさんに手紙を書き始めました。



ウォーン、ウォーンウォーン。いちばん泣いていたのは、ワンターでした。

「もう、うるさいわねえ。もう少し静かに泣いてよね」

ペロルはそういいましたが、自分も涙まみれで自慢の緑と黄色の羽がぐしょぐしょです。他のみんなも泣いていました。

「そうか、そういうわけじゃったか」

サンタさんはマルティンの手紙を大切そうにポケットにしまいました。

「サンタさんのいったとおりだったわ。見えてることだけじゃわからないのね」

涙をふきながら、マリアンがいました。

「だけど、マルティンが悪いところもあるよな」

とホビーがいうと、ペロルがホビーの頭をつきました。

「なんてこというのよ。ホビー。あなた、お母さんがいなくなったらどう思うの？」

「いて。そんなことわかんないよ。あいてて」

部屋の中を逃げるホビーとおいかけるペロル。しかたなくヴィーボとホツクルが二人を引き離しました。

マリアンがサンタさんにいました。

「サンタさん。マルティン君に新しいお母さんをプレゼントするの？」

「残念じゃがな、マリアン。それはできないことじゃよ」

「じゃあ、マルティンはどうなるの」

みんなも息をのんでサンタさんのこたえを待ちました。サンタさんはみんなを見回しました。心配そうな顔が並んでいます。

「わっはっは。みんないつになく真剣なようじゃな。それじゃあ、ひとつ、みんなにも協力してもらおうとしよう」

サンタさんにいいアイデアがあると知って、みんなほっとしました。それからマルティンへのプレゼントの相談を始めたのです。



日曜日のお昼前、マルティンは港の堤防の先つちよに一人で腰をかけていました。お父さんは仕事にでかけてしまいました。このところ雨が多くて、仕事がかどらなかつたから、お父さんは日曜日にも働かなければならなかつたのです。

ビックニックに行く約束を守れなかつたお父さんは、何度もマルティンにあやまりました。

でもマルティンはそれほど残念じゃありませんでした。とうのうもビックニックに行くのが少し恐かつたからです。きつと他の子どもたちもビックニック山にいて、お母さんといっしょに楽しく遊んでいると思えたから。

「今度こそ絶対にビックニックに行こうな。帰りに何かおいしいものを買ってくるから、今日はお留守番しておくれ」

お父さんが出かけるとすぐに、マルティンはこの堤防にやってきました。寂しいとき、つらいとき、涙がどうしても止まらないときには、マルティンはこの堤防に来ることにしていました。

キラキラと輝く水面と、堤防でくだける白い波。遠くの船の汽笛。カモメの鳴き声。その中にいるとマルティンは心が安まるのです。他に人がいないから、悲しいことも恐いこともおきないと思えるのです。

今日はとてもいい天気でした。遠くの半島にある灯台もくつきりと見えています。絵を描くのが好きなマルティンは、その灯台と海をスケッチしていました。

そのとき、めずらしいものがマルティンの目に映りました。「なんだらう？」

それはちやうと不思議なかつこうをしたカモメでした。赤い帽子と茶色い靴。カモメは灯台のすぐ脇を通り抜けると、波につかまりそうなほど低く降りてきて、まっすぐマルティンの方にやってきます。それは郵便かばんをさげて飛ぶワイマールでした。



ワイマールはマルティンのすぐそばに降りると、かばんの中から、くちばしで手紙を取り出してマルティンに渡しました。びっくりするマルティンを見て、ワイマールはニッと笑ってから、ふたたび空高く登っていきます。サンタさんのたのみことはたせたので、ワイマールもきげんです。

『こんにちは。マルティン。手紙をどうもありがとうございます』

手紙を見たマルティンは驚いて声もでませんでした。それはサンタさんからの手紙だったのです。

この堤防からビンに入れて流した手紙がちゃんとサンタさんに届いて、その返事が返ってきたのです。手紙にはこう書かれていました。

『プレゼントはもう用意したんじやが、かんたんに渡せるものじゃないのな。クリスマスイフの夕方にまたここにおいて』

マルティンはその手紙を画用紙の間にはさみました。それから考え込んでしまいました。

サンタさんのプレゼントはいいなんでしょう。本当に新しいお母さんなのでしょうか。もしもそうなら、やさしいお母さんなのでしょうか。マルティンはうれしい気持ちと恐い気持ちをいっしょに感じました。

でも、この話は誰にもしませんでした。お父さんにさえ秘密です。



クリスマススイフの日がやってきました。マルティンは堤防に座って一人で待つていました。

あたりがだんだん暗くなってきたとき、マルティンの目の前に突然、けむりのようなものがあらわれました。そして次の瞬間には、そこから大きな白い光が現れて輝きました。

マルティンはびっくりして声でもません。白い光はとてもきれいでしたが、あまりにまふしいのでマルティンは思わず目をつむりました。

チリリンと音がきこえました。

マルティンは目を開けてびっくり！

そこには大きな馬車が止まっていたのです。いえ、馬車をひいているのは、馬ではなく2頭のトナカイでした。そして、ぎよしゃの椅子に座っているのはくるくるとした目のアライクマでした。

「こんにちは、マルティン。ボクはボビーだよ。それからこうちがウィーボで、そっちがポツクルさ。よろしくね」

自分のなまえを呼ばれても、マルティンはボカンと口をあけてつたっていました。ボビーは馬車の椅子から飛び降りて、マルティンのずほんのひさのあたりをポンポンとたたきました。

「だいじょうぶだよ。ボクたちはサンタさんの仲間なんだ」

「サンタさんの？」

「そうそう。じゃあ、馬車に乗ってよ。ほらほら早く」

ボビーはマルティンを馬車の中に押し込みました。

「それじゃあ、出発進行。たのんだよ。ウィーボ、ポツクル」

「まかせてよ」

とウィーボ。

「今夜のためにバイソングラスをたくさんたべたもんね」とポツクル。

「わお。それじゃ元気いっぱいだな。じゃあ、行こう！」

チリリリリン！

ボビーが元気よく鈴をならすと、馬車はゆっくりゆっくりと空へ上り始めました。



馬車の中でマルティンを迎えたのはヘロルです。

「ようこそ、マルティン。私はガイドのヘロルよ。よろしくね」

「こんにちは。でもガイドってなに？」

「この窓から見えるものを説明するのがガイドよ。さっそく始めるわよ。右手に見えてまいりましたのが、学校でーす」

ヘロルにいわれるままに馬車の窓の外を覗くと、マルティンの学校が見えました。

「本当だ。ブランコがあんなに小さくなっちゃった」

初めて空の上から見る景色にマルティンは目を丸くしました。

「左手に見えてきたのが、ピクニック山でーす」

よく遊んだ山も川もみんなそこにありました。やがて馬車が雲の上まであがると、街はマルティンの片手にのつかってしまふほど、小さくなりました。

その様子を見ているうちに少し寂しくなつて、マルティンはふかふかのクッションにもたれました。

「お父さん心配しないかなあ」

すると、またまたびつくりすることがおきました。真っ白なクッションがしゃべり出したのです。

「大丈夫だワン。サンタさんがちゃんと考えてくれてるんだワン」

そうです。クッションだと思つたのは、毛むくじらのワンターだらつたのです。

「あり。びつくりしたあ。今日は驚いてばかりだ。君もサンタさんのお友だち？」

「ワンワン。ワンターだワン」

「ダメじゃないの、ワンター。あなたはクッションなんだから」

ヘロルが注意すると、

「だってマルティンの涙が背中におちて冷たいんだワン」とワンターがこたえました。

いつの間にか、マルティンの頬に大きな涙が流れていたのです。



「あらまあ、マルティン。幼稚園のお友だちみたいよ」

ペロルにそういわれたので、マルティンは目をゴソゴソこすつていいました。

「外を見て、目にゴミが入っただけだ」

「ふふふ。じゃあ、ガイドを続けるわよ。左の方に見えてきたのが、おおくま座です。北斗七星で有名な星座よ」

あたりはすっかり暮れて、窓の外はまっくらでした。そして小さな氷をばらまいたみたいに多くの星がマルティンを取り囲んでいました。ひとつひとつがいつもよりも大きくて、明るく輝いています。あたたかいワントーのクッションに包まれて、そのすばらしい夜空をながめるうちに、マルティンは時間を忘れてしまいました。そしてペロルは星ほしにまつわる話をたくさんしてくれました。

その頃、同じ夜空を見上げながら、サンタさんははつかねずみのマリアンに話しかけていました。

「準備はいいようじやな」

「はい。いつでもいいですよ」

「ヴィーボとホックルが戻ってきたら、私は世界中の子どもたちのところへ出かけなくてはならん。あとは、みんなにまかせるが大丈夫じやな」

「はい。安心して行つてください。私たちサンタランドの住人だもん。このくらいのお手伝いなら、きちんとできます。でもね、サンタさん」

サンタさんは、リアンのほうを見ました。

「なんだい」

「マルティン君、喜んでくれるかな」

「もちろんじや。みんなの気持ちもきつと伝わるじやろう」

サンタさんの言葉を聞いたリアンは、うれしそうに笑っていいました。

「メリークリスマス、サンタさん」

「メリークリスマス、マリアン」



「さあ、ついたよ」

そういつてボビーが馬車のドアを開けました。マルティンはステップを降りながら、まわりの景色を見ました。そこにはマリアンが待っていました。

「私はマリアンよ。よろしく。もう準備はできているから、私についてきて」

マリアンの後をマルティンはだまつてついていきました。でも、ちよつと様子が変です。

「ねえ、マリアン。ここはボクの町にそっくりだよ」

マルティンがそう尋ねると、マリアンはにっこり笑つて答えました。

「そっくりなんじゃなくて、あなたの町なのよ、マルティン」

「ええ？」

マルティンにはわけがわかりませんでした。あんなに長い時間空を飛んできたのに。

「でも、ちよつとだけ違うのよ。さ、ここよ」

マリアンが指さした家は、間違ひなくマルティンの家でした。でも、どことなく違う気もします。いつも冷たい感じの家のなか、明るくあたたかな感じがするのです。

「こわがらないで、入つてくらんなさい」

マリアンにうながされて、マルティンはおそろおそろドアを開けました。

家の中には女の子がいました。女の子はオープンの前を行ったり来たりして、何かをつくっていました。

マルティンはその顔をじっくりと見ました。すると懐かしい匂いが鼻をくすぐりました。

そのとたんにマルティンは、写真でしか知らなかったお母さんのことを思い出したのです



「お母さん！」

マルティンは思わず声をだしました。するとお母さんはマルティンの方を見てほほえみました。

「ああ、マルティン… 大きくなったわね」

お母さんはマルティンにかけ寄ってひざまずくと、やさしく抱きしめました。マルティンはどうしていいかわからずじまいましたが、お母さんの匂いにつつまれるうちに涙があふれてとまらなくなりました。

マルティンはお母さんに抱きついて、泣きじやくりながら何度も何度も「お母さん」と叫んでいました。

「どうして、どうしてボクを置いていつちやったの？ お母さん」

お母さんも目に涙をうかべて、何度も首をふりました。

「ごめんね、マルティン。お母さんもどうもつらかった…。悲しくて悲しくて何度も泣いちゃったの。でもね、今は神様に感謝してるのよ。お母さんがいなくても、マルティンはこんなにいい子になったんだもの」

マルティンはびくつと身体をふるわせました。それから、ちよつと考えていました。

「ボクね、いい子じゃないんだ」

お母さんは少し身体を離して、マルティンの顔を覗き込みました。

「お友だちとケンカしちゃうから？」

マルティンは目を丸くして、

「お母さん、知ってるの？」

「そうよ。いつもマルティンのこと見てるの。だからなんでも知ってるわよ」

「仲良くしたいんだけど、ダメなんだ。そんなことしたくないのに、しちゃうの」

「そうなの。じゃあお話の続きはあとでしましょう」

お母さんはそう言って立ち上がり、マルティンの手をとりました。

「さ、こっちへいらっしやい。マルティンの大好きなクッキーをつくっておいたのよ」



お母さんはマルティンをテーブルにつかせて、いろいろな動物のカタチをしたクッキーとミルクを出してくれました。

「このクッキー覚えてる？ 赤ちゃんの頃マルティンが一番好きだったの」
そのクッキーは象さんのカタチをしていました。クッキーはすくおしくくて、ひと口食べると、もう次のひと口が食べたくなるくらいです。それに、昔のことをとんとん思いださせてくれる味でした。

「いちばん大きいからだよ」

「きつと、そうね。マルティンはいしんほうだったもんね」

マルティンはクッキーを食べながら、照れくさそうな顔をしました。

「それに、とても元気な赤ちゃんだったのよ。病気もせんせんしなくて、他のお母さんたちからうらやましがられたんだから。歩きはじめたのもいちばん早かったわよ」

「ふーん。ボク、かけっこなら誰にも負けないよ」

「そうね。みんなマルティンの足が速いから、いいなあと思ってるわよ」

「そうかなあ」

「そうそう。この間、クララの筆箱を壊しちゃったでしょ」

「ごめんなさい」

マルティンはお母さんにそのことはないよにしておきたかったので、でも、お母さんはしかりませんでした。

「クララはね。赤ちゃんの時に病気をして、今でも上手に歩けないの。だから、マルティンが走るのをいつもうらやましそうに見てるわ。知ってた？」

マルティンは「ううん」と首をふってから、食べかけのクッキーをお皿に戻しました。急に自分のことが恥ずかしくなりました。

「誰でもね、人をうらやましいって思う気持ちがあるのよ」

「ふーん」

「でも、それで人を傷つけてはいけないの。マルティンにもわかっているんでしょ？」

「うん。でもどうすればいいの？」



「お友だちとケンカしそうになったら、そのお友だちのことをよく考えるの。そして自分から話しかけてみるの。そうすればきっと仲直りできるはずよ」

「ほんとに？」

「ほんとよ。お母さんね。みんなと仲良くなって、人に親切にできるマルティンになつて欲しいな」

「…」

マルティンが困った顔をしたので、お母さんはマルティンの手を取りました。

「人はたったひとりじゃ生きていけないわ。お父さんみたいにおうちをつくる人がいて、お魚をとる人がいて、学校の先生がいて、いろいろな人がいて助け合っているから生きていけるの。そうでしょ」

「うん。だから仲良くしなくちゃいけないんだね」

マルティンがさういうと、お母さんはにっこり笑いました。

「そうよ。マルティンならわかってくれると思うてたわ。さあ、それじゃあ今日はおいしいものをつくつてあげるからね」

マルティンはお母さんを手伝ってお料理をつくりました。それからいろいろな話をしながら、食事をとりました。お母さんは本当にお料理が上手でした。

そして久しぶりにお母さんといっしょに眠りました。

「そうだ、マルティン。これをあげるね」

ベッドの上でお母さんがくれたのは、ロケットのペンダントでした。フタをあけるとお母さんとマルティンがいっしょに写った写真が入っていました。

「いつまでもお母さんはマルティンのそばにいる。だからお父さんといっしょにがんばって」

「うん。わかった」

「じゃ、約束よ」

お母さんは子守歌を歌いはじめました。いつかきいたことのあるその調べを耳にすると、マルティンはとても安らかな気持ちになって、いつしか眠ってしまいました。



「マルティン、マルティン」

お父さんの声に驚いて、マルティンは飛び起きました。すぐあたりを見回しましたが、お母さんの姿はどこにもありません。

「お母さんは？」

「なんだ、お母さんの夢を見てたのか」

「夢じゃないよ。本当にお母さんに会ったんだ」

「そうなのか。それならお父さんも会いたかったな」

お父さんは残念そうに咳いてから、後ろに隠していた紙包みをさしました。

「メリークリスマス、マルティン。お父さんからのプレゼントだ」

マルティンは急いで紙包みをあけました。

「わあ、どうもありがとう」

中から出てきたのは新しい筆と絵の具でした。

「すごいなあ。メリークリスマス！お父さん」

こんなに嬉しそうな顔をしたマルティンをお父さんは久しぶりに見ました。

「じゃあ、お父さんはお仕事に行つて来るよ」

「うん、いつてらっしゃい！」

声まで変わったみたいに元気なマルティンでした。

お父さんがでかけると、マルティンは自分の胸に手をおきました。

お母さんがくれたロケットはそこにちゃんとありました。

「やっぱり夢じゃなかったんだ。お母さんに会ったんだ」

マルティンはロケットを握りしめました。それからそうと匂いをかいでみました。お母さんの香がして、マルティンは幸せな気持ちでいっぱいになりました。

「サンタさん。どうもありがとう。ボク、みんなと仲良くするよ。お母さんが見てるもんね」



年が明けてしばらくした頃、マルティンからサンタさんに手紙が届きました。

サンタさんはみんなに読んであげました。

手紙によると、マルティンはお父さんにもらった絵の具と筆で、クラスのお友だち全員の絵を描いてみんなにプレゼントしたのです。そして、今までのことをあやまりました。

「今は毎日お友だちと仲良く勉強したり、遊んだりしているそうじゃよ」

「よかったねえ」

「うん、よかった、よかった。みんなが助けてくれたおかげじゃよ」

サンタさんにほめられてみんなはとっても嬉しそう。

「それでな、マルティンからみんなにもお礼のプレゼントがあるようじゃ」

それはサンタランドのみんなが描かれている一枚の絵でした。

「やった〜」

「マルティン、上手ねえ」

「見てよ。この私の美しさ」

「絵の方がきれいだなあ」

「なんですってえ」

と、わいわいがやがや。マルティンが元気になったときいたので、みんなまで元気が出てきたみたいです。

マルティンの絵はさっそくサンタさんの家に飾られました。きっと今でも飾ってあることでしょう。

おしまい

こんど てがみ
今度はどんな手紙がとどくのかな？





バリアフリー絵本・童話シリーズ

Dreaming Tales

「Dreaming Tales プロジェクト」は絵本や童話をネットを通じてご提供するものです。読み聞かせなど、子どもさんとのコミュニケーションの一助としてご活用いただければ幸いです。

この作品の閲覧や再配布は自由にできますが、著作権を放棄するものではありませんので、販売や改版はしないでください。

また、各作品には、朗読映像や手話映像、点字訳などを整備して、さまざまな人たちが読めるようにしたいと考えています。各方面のご協力が必要ですので、ご協力いただける方、興味のある方はどうぞご連絡ください。

にいの☆ゆうひこ
yuhiko@studioamuse.com

あとがき

お読みいただきありがとうございました。

この作品で、美しい絵を描いてくれた木村リサさんとは「パプー」を通じて知りあいました。

彼女が「パプー」に掲載されている、「あしのぼうけん～あとし、そらをとぶ～」を読み、その絵のきれいさに私がほれこんでメールを送らせていただいたのです。

※木村リサさんの他の作品もどうぞご覧ください

「あしのぼうけん～あとし、そらをとぶ～」

<http://p.booklog.jp/book/1269>

「おこめつぶ」

<http://p.booklog.jp/book/4638>

変なおじさんからのメールにもかかわらず、ご縁があったのでしょうか、木村さんとのメールでの親交が始まりました。

そしてこの作品の絵を描いてくれることになったのです。

ですから、実はまだ木村さんとはお会いしたことはありません。

電子出版もさることながら、こういう創作活動ができるのもネット時代のおかげです。

おかげさまでクリスマスに間に合いました。

この作品では、協力することの大切さや、表面ではわからない真実の存在など、いろいろなことを表現しています。中でも一番にいたかったのは「幸せ」ということです。

誰もが幸せでいてほしいし、その権利があると思います。

まわりのみんなが幸せであることが、自分の幸せにつながるんだということを子どもたちに知って欲しいと思って書きました。

読んでくださった皆さんに メリークリスマス！！

にいの☆ゆうひこ